

始まりの街

東京都 桃田 そら

十八歳まで陸奥^{むつ}で暮らしていた。

中学の進路相談で「早くおばあさんになりたい」と担任を困らせ、ぶりっ子全盛期に高校生となった私は、進路を聞かれても「わかんない」と首をかしげていた。ぶりっ子だったわけではない。現実から逃げていたのだ。あの頃は、山に囲まれた空を見上げるとは、「窮屈そうだなあ」と呟いていた。更級日記を書いた孝標女は上総国の市原で『源氏物語』に憧れ、京に行くことを夢見ていた。

「デザインで食っていけるか！」という父からの叱責に、あけなく消えて無くなってしまふほど、私の夢は不確かなものだった。

高校三年になったある日、千葉県市原市在住の叔父から

「うちの近所に全寮制で、奨学金制度のある看護専門学校があるのだけど受けてみないか」と、父に電話があった。父が経営する建設会社の業績が悪化し、私の高校入学と同時に母は家を出た。父は、叔父の話にすっかり乗り気になり、

「手に職をつけれ！」と、鼻息荒く私に言った。

「え、何のこと？」

「看護師になるのは嫌か？」

「嫌っていうか、向いてないと思うよ。私、臆病だから」

「臆病だからいいのだよ。慎重ってことだろ？大事な事だよ」

「え、でも」

「とにかく受けてみる、わかったな！市原がいいよ、市原だ！」

市原、市原と呪文のように言われても、集団生活が苦手、自信がない、気が小さく勇気がない、失敗したくない、人に迷惑をかいたくない、上げていったらきりがないほど、無い無い尽くしの私が、看護師になれるわけがない！噴きあがった思いは、言葉にならないまま喉の奥に引つ掛かり、涙が勝手にあふれた。お父さんなんか、私の将来のことに口出しして欲しくない！

けれども、就職しか道はないと思っていた私は、大人になるまでの猶予期間を得られる事に、心は次第に揺らいでいった。そしてついに、これも運命かもしれないと、駄目元で試験を受ける事にした。結果は6倍近い倍率で、見事に惨敗。父の顔を立てたのか、潰したのかわからない。しかし、二月に誕生日を迎え、十八歳になった私にありえないことが起こった。

繰り上げ合格の知らせが届いたのだ。

三十七年前、陸奥を後にした私は、叔父に市原の養老川臨海公園に連れて行ってもらった。丁度日が落ちる前だった。海沿いの遊歩道は、撫子の花色の霧に包まれ、葉祥明の絵のようだった。やがて夜の色が濃くなると、海と空の間から起き上がった灯りが、無数の宝石をちりばめたように煌めき、真っ白い煙突がひときわ際立って見えた。風になびく煙、波間に揺れる光。叔父は

「ここは、石油コンビナート、臨海工業地帯。工場の灯りだ」と言った。一つ一つの単語がキラキラと碧く光っていた。

内房線の八幡宿から小湊バスに乗り、坂を上り下りした先の高台が辰巳台。その終点に、まるで空に溶け込むように学校も寮も実習病院もあった。辰巳台は住宅や商業施設が建ち並ぶ住宅地で、せいせいするほど空が広い。八幡宿駅の近くに、源頼朝が戦勝祈願のため銀杏の枝を逆さに植えたという飯香岡八幡宮がある。鳥居越しに見える朱色の拜殿は、緑に守られとても神秘的だった。始発の病院前から千葉駅まで、数少ない直通バスも通っていた。辰巳台から大厩方面に進むと、窓の景色は住宅地から一気に広大な田園風景に変わる。極端に人家が少ないこの辺りは故郷の景色に似ており、窓の外をぼんやり見ながら、バスに揺られている時間が好きだった。

同期生達と机を並べ、看護の講義を受けながら、私は常に後ろめたさを感じていた。昔からの憧れや、献身的な思いからこの場所に来たのではない。そんな私が、ここにいてもいいのだろうか。寮生活にも慣れた初秋、解剖学実習が行われた。解剖室は、ホルマリンの匂いがした。厳肅な気持ちでご遺体の周りを囲む学生。ご遺体は肝臓疾患による黄疸のため、黄色い肌をしていた。黙祷を捧げ、解剖が始まった。すると「ばきっばきっ」と骨を切っていく音が、耳に、胸に深く響いた。何故、この方は解剖に協力して下さったのだろう。何故、この方のご家族は許してくれたのだ

ろう。疑問がぐるぐると頭の中を駆け巡る中、肋骨がバツカリと取り外された。誰一人顔を背けることもなく、真剣なまなざし。その時私は突然

「私は、ちゃんとここにいる」と小さな拳を作り胸に押し当てた。ご遺体に対して自分の身を正すためだったのか、スタートラインに立ったつもりだったのかはわからない。現実とは思えない光景の中で、私は初めて自分の輪郭が浮き上がって見えた。私の心臓はどくどくと鼓動し、確かに『生きている』と思った。

病院の裏口を出た後、私は詰めていた息をようやく吐いた。そのまま、寮の玄関に入ると、右側に食堂が見えた。しばらく食事は喉を通りそうにない。こういう時でも平常心を保ち、食事できる人がいるのだろうか。するといたのだ。カーテンの隙間から差し込む夕日が彼女の背後まで一直線にのび、明日に向かって祈っているようにも見えた。

人は生きていくために食べる。たおやかで逞しい私になりたいと心に誓った。いつしか食堂は、普段の賑やかさを取り戻していた。

実習先でクラゲのように漂っていると、何の役にも立たない自分がつくづく嫌になってくる。朝から何度もトイレに入り浸ってばかり。浮かない顔で寮に帰ると、同郷の友人が「あんまん食べに行こう」と誘ってくれた。ヤマザキデイリーストアであんまんを買ひ、ハフハフと食べながら坂道を下っていく。私のピンチが彼女にはわかる。彼女はいつも、絶妙なタイミングで私に声をか

けてくれる。

この日の朝、受け持ち患者さんの看護計画を意気揚々と発表した。すると教育担当ナースに

「なにそれ。あなたの看護ってそういう事？」と指摘された。手術で切除した腫瘍は医師から良性と説明を受けたが、患者さんは「本当に良性なのかしら」と心配していた。そこで、再度私が医師に伺い、良性がどうか確信し伝える、という看護計画をたてた。「もっと他にできる事があるでしょう」と指摘されてもさっぱりわからない。隣を歩いていた彼女が「五井にはね、デエデエポーといつて、雲をつくような大男がいたらしいよ」と笑った。高齢の受け持ち患者さんから教えて頂いたという昔話。私はふと、受け持ち患者さんの声を、心から聴いていたのだろうかと思った。漠然とただ聴いていただけかもしれない。オレンジ色の空から「カアカア」とカラスの声が降ってきた。私の事をまるで笑っているようだった。

言わずと知れたバブル世代。市原に来てから、わずか一月後と同じ高校出身の夫と出会い、それから四〇年余りを共に歩んできた。辰巳通りにある、古いレンガ造りのロッシュという小さなレストランでは、暖炉の炎を飽きずに眺めながらハンバーグを食べた。私は、父親譲りの激しい内面を知るゆえに、人を傷つけないよう口数が少なく、打ち解けるまでに時間がかかる。五井から養老溪谷まで、レトロな車両の小湊鉄道に乗った時、汽車と呼んでいた故郷の話で盛り上がり、しだいに、朱色の観音橋の上や、海

釣り公園、ゾウの国市原で「映える」ポーズも一緒にできるようになっていった。当時夫は仕事のために初台に住み、車を持たなかったため、デートが終わると、必ず私を小湊バスに乗せてから初台まで帰っていった。どのような時も声を荒げること無く、何を言っても受け入れてもらえる安心感を得た私は、少しずつ我儘になっていったのかもしれない。

ある日夫は、都内で夜景が見える高級レストランの窓側の席を予約してくれた。精いっぱいおしゃべりをして席に着くと、いつもと同じシャツで、ニコニコ笑う夫が目の前にいた。この日の為に、夫の生活をどれほど切り詰めさせてしまったのかわからない。「私は、いったい何様のつもりなのだろう」知らぬ間にバブルに浮かれていた自分が急に恥ずかしくなり、せつかくの夜景もまともに見られなかった。私はこの時気づいた。夫が居てくれれば、それでいい事を。辰巳台の明るい空と友人や患者さん方、多くの医療関係者や夫のおかげで、無事に専門学校を卒業することができた。それから実習先の病院に就職すると、夏には結婚し、翌年には長女を出産した。

夫との結婚を、父はひどく反対した。高卒で働く夫に、「お前が持っているものを見せてみろ」と言わんばかりの剣幕だった。そういうふうに見下すところが、子供の頃から嫌だった。父にはきつとわかってもらえないだろう。目に見えるものしか信じてないから。

私は生まれて初めて、親の反対を押し切ってまで、自分の人生を自分で決めた。

仕事を持ちながら子育てをする上で一番大切な事を教えてもらったのもこの街だった。育児休暇が明けて二カ月程過ぎ、一歳二か月の長女は「顔面神経麻痺」を患った。小児の場合原因は不明で、ストレスなどで血流が滞ると耳管が詰まり発症する場合もあるという。看護学生の頃からお世話になっていた医師から「あなたも復帰したばかりで大変だけど、お子さんはもつと大変なのかもしれないね」と言われた。その頃夜勤の度に、急変が重なり、私はすっかり、自信を失くしていた。元来心の切り替えが下手な上に、自分の事しか見えなくなる私は、家においても仕事の事ばかり考え、心が娘のそばにいかなかった。子供は敏感に感じ取ってしまう。幸いほどなくして完治したが、両立する上での教訓となった。

市原での親子三人の生活も、辰巳台東だった。六階にあるマンションのベランダから、小さく緑十字が見えた。目前に建物はなく、いつもカーテンを開け放していた。「ママのびょういんだ！」という長女の声が、今でも耳に残っている。あの頃、窓から聞こえた救急車のサイレンさえ、娘にしてみれば「ママのびょういんだ」だった。

春になると、辰巳中央公園の桜が見事に咲き、その下で毎年シートを敷いてお花見をした。花を仰ぎ見る事に気を取られると、ミクロの世界に突入するような勢いで、二歳の長女はもう

一心に地面を見ている。蟻の行列だ、巣穴に向かって行進中。慌てて隣に、しゃがみ込む私の頬に、長女の柔らかな髪がくすぐつたい。

市原こどもの国現 千葉こどもの国キッズダム)には何度通った事だろう。存分に遊びまわり「さ、帰ろう。」と声をかける。すると「かえらない！」と首を横に振り、滑り台の脇の木製の坂道を、ふらふらと登っていった小さな背中。閉園の音楽に、ようやく夫の胸にすっぱり収まると、あつという間に寝息が聞こえた。四年ほど前に、同じ年頃になった孫を連れて行った。帰り道、孫の寝顔が、夫の大きな肩の上で、ボワンボワンと弾むのを見て、時間が逆戻りしたように、緑の風さえ懐かしかった。

長女が四歳になる頃、夫の長崎への転勤が決まった。次女は、私のお腹の中にいた。私は、二十八歳になっていた。

「好き」の延長線上に仕事を見つけようとして、白衣を脱ぎ棄てたことも何度かあった。けれど結局再び、白衣に袖を通して自分のいる。向いているとかいないとか、好きとか嫌いではなく、一瞬一瞬を懸命に生きているうちに、看護師は私の一部になっていたのだ。

そのうちあつという間に、結婚して三十年あまりの月日が流れ、気づいたら二人の娘は嫁ぎ、八歳と六歳の祖母になっていた。中学時代、お先真つ暗で「早くおばあさんになりたい」と担任を困らせていた私は、今では孫達に「バアバ」と呼ばれている。丁寧な「お」をつけられると「おばあさんって言わないで！」と子供

相手にむきになって元気に叫んでいる。両方ともまぎれもない私なのだ。

市原は私にとって、始まりの街だった。

五十代半ばとなり、改めて更級日記を紐解いた。三十路を過ぎた長女が嫁ぎ、心にぼっかりと穴が空いたような時だった。十年前に次女を嫁がせた時は、仕事の忙しさがピークでヴァイタリテイに溢れていた。あの頃の自分とは確実に異なる、緩やかな老いを感じ始めていた時だった。読み進めていくうちにすっかり夢中になり、孝標女の嘆きが自分と重なり、私が抱える孤独感は千年前と変わらない事を知った。すると、ささやかな私の人生に思いがけず、光が射した。孝標女も私も人生の宝物に巡り合い、愛し、育み、大切にすることができていたではないか。そして、これまで起こったすべての出来事が一本の線のようにつながってみえた。時を経なければわからなかったこともある。それは親の有難み。私に市原へ行くことを強く勧めてくれたのは、亡くなった父だった。

市原には、地磁気の逆転の記録である「チバニアン」がある。地層の積み重なりは、時間の可視化。それは、年齢とともに蓄積されていく経験にも似ている。様々な物事に触れて得たものが、異なる粒子のように時間をかけて堆積し、今の私をつくりあげてきた。市原で過ごした十年間は、地軸が逆になるほどの大転換時期だったと思う。